JAアオレンが回収、製造する（左から）リンゴの搾りかす乾燥品、コーヒー豆のかすの乾燥品とJA全農北日本くみあい飼料が配合するあおもり倉石牛の飼料（右端）

「倉石牛」飼料に活用

弘前市内ファミマで回収 コーヒー豆とリンゴ搾りかす

JAアオレン

桜田市長（右から2人目）に市内のファミリーマート10店舗から回収したコーヒー豆のかすを「あおもり倉石牛」の飼料に活用する取り組みを報告した小笠原代表理事会長（同3人目）ら

県農村工業農業協同組合連合会（JAアオレン、弘前市）は4月1日、市内のファミリーマート10店舗で廃棄するコーヒー豆のかすを回収し、ジュースの製造過程で出るリンゴの搾りかすと混ぜて、県のブランド牛「あおもり倉石牛」の飼料に有効活用する国内初の取り組みをスタートする。市の「SDGs未来都市計画」に即した試みとして、JA全農北日本くみあい飼料（本社仙台市）と協働で実施し、地域資源の循環と低温・低コスト乾燥で、環境負担低減、地産地消を目指す。（稲葉智絵）

国内初の取り組み開始

環境負担低減、地産地消へ

県産リンゴを使ったジュースを製造するJAアオレンは、搾りかすを有効利用しようと2019年5月、イオンと蒸気による保温の相乗効果で低温・低コストの乾燥が可能な大型乾燥機「レドックスマスター」の国内1号機を導入。年間約5000トンの搾りかすのうち、約600トンの乾燥品を製造し、飼料のほか、アップルレザーや農業用資材に活用している。

さらに、21年からはリンゴの搾りかすの乾燥品にコーヒー豆のかすの乾燥品を混ぜたものをJA全農北日本くみあい飼料八戸工場に供給、大麦などを配合した飼料が五戸地方で生産されている黒毛和種「あおもり倉石牛」の給餌に活用されている。同社によると、リンゴの搾りかすの味と香りが牛の食欲増進、コーヒー豆のかすの利尿作用による老廃物排出が健康増進につながっているとし、昨年、この配合飼料の給餌が生産の規定に加わったという。

JAアオレンはコーヒー豆のかすを、これまで県外から購入していた。4月からは市内のファミマ10店舗からの購入に切り替え、廃棄処分されていた資源の有効活用、県内循環サイクルの確立を目指すとともに、市が取り組むSDGs未来都市計画に貢献したい考えだ。小笠原康彦代表理事会長によると、1カ月で400～600キロの回収を見込んでいる。

市内のコンビニからの回収開始を前に28日、小笠原代表理事会長、同社営業部の鈴木亮課長らが市役所を訪れ、桜田宏市長にそれぞれの乾燥品と配合飼料を見せながら、取り組みの概要を報告。小笠原代表理事会長が「新たな形の地域循環サイクルとしてスタートを切る。生産者、消費者への還元に重点を置き、ゆくゆくは市内のファミマ全店舗からの回収を目指すとともに、取り組みを県内全域に広げていきたい」と力を込めた。

桜田市長は「地域資源を無駄なく利用している取り組みは、SDGs未来都市計画のモデルケースになる。これからも地域の知恵を結集し、循環サイクルを先導してもらいたい」と期待を寄せた。